

14. 大学体育における共通科目「スポーツ実習」 JUDO授業の検討

—社会的スキル尺度・攻撃性尺度・授業評価から—

| | |
|-----------|-------|
| 和歌山大学 | 矢野 勝 |
| 和歌山大学 | 池田 拓人 |
| 関東学園大学 | 高橋 進 |
| 兵庫教育大学 | 永木 耕介 |
| 京都教育大学 | 藪根 敏和 |
| 神戸大学 | 岡田 修一 |
| 甲南大学 | 山崎 俊輔 |
| 甲南大学 | 曾我部晋哉 |
| 龍谷大学短期大学部 | 徳田 眞三 |

14. Evaluation of liberal arts JUDO class in univer- sity physical education

—From social skill standard, aggression standard and class evaluation—

| | |
|-------------------|---|
| Suguru Yano | (Wakayama University) |
| Takuto Ikeda | (Wakayama University) |
| Susumu Takahashi | (Kanto Gakuen University) |
| Kosuke Nagaki | (Hyogo University of Teacher Education) |
| Toshikazu Yabune | (Kyoto University of Education) |
| Shuichi Okada | (Kobe University) |
| Shunsuke Yamasaki | (Konan University) |
| Akitoshi Sogabe | (Konan University) |
| Shinzo Tokuda | (Ryukoku University) |

Abstract

The present study investigated the effects of a judo teaching program on social skills, aggres-

siveness, and satisfaction. The program is designed for beginners so that they can teach judo skills to each other. To study the effects of the program we administered the social skill standard (KiSS-18), the aggression standard (BAQ), and course evaluation questionnaires to students enrolled in liberal arts "sports practice" JUDO, which uses the 15-week judo teaching program.

The findings of this study are summarized as follows:

1. Social skill scores obtained after the 15-week JUDO course were significantly greater than those obtained before the course ($p < 0.05$).
2. There was no significant difference in aggression scores obtained before and after the JUDO course.
3. The satisfaction rating of JUDO was higher than that of other sports activities in "sports practice" of the university physical education. From these results we have conclude that JUDO course using the judo teaching program may achieve the purpose of the university physical education and is suitable for liberal arts "sports practice".

I はじめに

1991年の大学設置基準の大綱化の名のもとに、大学の自主性が高まりカリキュラム改革はスタートをきった。それまで、設置基準によって必修科目として守られていた保健体育科目は、各大学独自のカリキュラム編成により、新しい枠組みが作り上げられていくことになった。日本体育学会のシンポジウムにおいても、1992年には、「大学の保健体育はどう変わろうとしているか」、1993年には「大学改革の体育の現状と未来」というテーマが取り上げられ、大学教育における保健体育のあり方についての議論を深めていった。しかしながら、保健体育科目において従来までの必修科目の枠がはずされ、選択科目のひとつとしてカリキュラムが組まれた大学も数多く現れることになった。

さらに、1999年の大学設置基準の改正において、「大学は、その教育研究水準の向上を図り、その目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。」さらに、「教育内容及び教育方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならないものとする。」などがうたわれた。これにより、大学はFD（ファカルティ・ディベロップメント）と呼ばれる、授業内容・方法を改善するための取り組みに努めなければならなくなった。そのFD活動の一環として、学生による授業評価の実施が、多くの大学で始まることになった。さらに一方で、大学進学率の上昇や、高等学校における教育内容の多様化、留学生・社会人学生の増加など、学生の興味・関心・学力低下といった様々なことに対応する授業内容・方法を講じなければならない現状である。

1991年、設置基準の大綱化により、必修科目の枠組みを外された保健体育科目ではあるが、各大学による生き残りをかけて取り組んだ体育関連科目のカリキュラム内容・方法が評価されているところもある。FDとして、実施されている学生の授業評価によれば、共通科目における体育関連科目の授業評価は、その他の科目の授業評価よりも高いことが報告されている¹⁾。笹原²⁾は、学生が期待する大学の体育は、1) 楽しく爽快であること 2) 人間関係がよく、新しい友人ができること、以上の二つであると報告している。さらに、大学体育の意義を、日本人の心と

体の健康を考えた場合、生涯スポーツの導入と友人関係育成の場として位置づけたいと提言している。近年、大学においても、引きこもりなどの心理的カウンセリングの必要な学生数が増加傾向にあり、多様な質の大学生に対応するためにも、大学教育における、体育の重要性は、以前に比較し高くなってきていると考えられよう。

さて、2006年10月、いじめを受けたことによる児童生徒の自殺という痛ましい事件が連続発生し、「文部科学大臣からのお願い」というメッセージが報道機関を通して流された。いじめ問題がクローズアップされ、大きな社会問題となっている。心の教育総合センターでは、「心の教育」の目標を「生命の尊さを実感し、愛情豊かに他者と共存し、個性的に社会を生き抜く力を育むこと」に設定し「心の授業」の実践を行っている。その「心の授業」の主たる内容は、「ストレスマネジメント教育」「人間関係体験」「自己発見・自己開発」の3つとして実践研究を行っている。ここでの重要なポイントは、自己をコントロールする能力が身につけてくると、自分の良い点、友人の良い点を見つける余裕ができ、人間関係づくりができるということである。これは、体育科における「体づくり運動・体ほぐし運動」の主なねらいである「自己や他者の体への気づき」「他者・仲間との交流」と同様なものと捉えられる。山口ら³⁾は、体ほぐし運動の具体的内容のひとつとして柔道を取り上げ、その可能性と有効性を報告している。それによれば、柔道を小学生が実施することにより日常の攻撃性が低減し、児童の情緒を安定させ、他者理解・コミュニケーション能力の向上に影響を及ぼす可能性がある⁴⁾と述べられている。また、高橋ら⁴⁾は相手との身体接触や触れ合いを多く取り入れた、グループエンカウターの理論を応用して、大学生を対象に柔道授業を行った。その結果、自己理解や他者理解が良好な認知を示し、好意的方向に変容したと報告している。近接学という対人距離を問題にした学問分野では、人間にはコミュニケーションに適した距離があるという。このような対人距離を、ホールは4つの距離帯に分類し、柔道における対人距離は密接距離と呼ばれる恋人が語り合う距離、慰めや保護の距離でもあるとされている。そして、対人距離は、どのようなコミュニケーション場面であるのか、また、相手との親しさによって影響を受けるとも言われている⁵⁾。以上のことから、柔道は相手との距離が、どの種目よりも近く身体接触を有することで、コミュニケーションを深め、友人関係を作りやすい可能性があることが推察できよう。

しかしながら、大学体育におけるスポーツ種目として柔道は、その価値認識が低いように思われる。スポーツ種目の中で、選択種目として柔道を希望する学生は、少数に止まっているのが現状であろう。そこで、お互いの教え合いができるように工夫した初心者柔道指導プログラムにより、「スポーツ実習」JUDO授業を実践し、大学体育における柔道授業について検討することにした。さらに、杉山⁶⁾が言うように初心者入門期では、スポーツから入って武道へと発展させていくことが適していると判断し、従来のマイナスイメージを払拭させる目的もあわせ、授業名称はJUDOとした。

本研究では、コミュニケーションに関連したスキルとして、対人関係を円滑にはこぶスキルである「社会的スキル尺度」(KiSS-18)、自己をコントロールする能力を「攻撃性尺度」(BAQ)の質問紙から捉え分析を行った。そして、お互いの教え合いができるように工夫された初心者柔道指導プログラムによる、共通科目「スポーツ実習」JUDO授業での効果を、社会的スキル尺度・攻撃性尺度さらには学生による授業評価から分析検討を試みた。そして、大学体育における柔道の可能性について言及することが、本研究の目的である。

II 研究方法

1. 調査対象授業

2004～2006年に実施したW大学教育学部教員養成課程対象の、共通科目「スポーツ実習」JUDOの授業。また、比較対象のために2004年前期に実施された他種目のW大学教育学部の共通科目「スポーツ実習」授業においても質問紙調査を行った。

2. 調査時期及び対象者

2004～2006年の前期（4月～7月）において実施した。授業は、1週間に1回、90分間の授業を15回行った。第1週目は、種目選択のガイダンスと体力テストを実施したため、JUDOの授業は実質14回であった。対象者は、教育学部1年生であり、年度により同時開講の種目は多少異なるが、水泳・バスケットボール・ソフトボール・テニス・ダンス・フライングディスク・バドミントン・JUDOの種目を前期に開講している。それらの種目の中から希望種目を選択し受講するシステムになっている。教育学部におけるJUDO選択者は、ほぼ第一希望者による受講生になっていた。各年度の内訳は表1の通りである。

表1 JUDO授業受講者数の内訳
Table1 Breakdowns of number of students in which JUDO class is attended

| | 男子 | 女子 | 合計 |
|-------|----|----|----|
| 2004年 | 8 | 22 | 30 |
| 2005年 | 10 | 16 | 26 |
| 2006年 | 12 | 16 | 28 |

3. 授業計画

①シラバス

表2は、W大学の2006年度版シラバスを手直したものである。2004～2006年のJUDO授業は、ほぼ同様な授業計画で実施した。

②学習形態と具体的な授業の進め方

学習形態は、技の説明・練習方法の説明時では、一斉指導を主とした教え込む授業を展開した。また、学習において次のようなことを強調しながら授業を進めていった。

- 1) 練習する前に、相手と握手をさせ簡単な自己紹介してから練習していった。また、終わって相手を交代する時にも握手をして、できるだけ多くの相手と練習した。具体的方法として、4列横隊に整列させて、1列目と2列目、3列目と4列目で2時間（2コマ）は練習を行い、次の2時間は1列目と3列目というように前半8時間目まで授業クラス全員と練習できるようにした。また、その時間内で出来るだけその列全員と練習できるようにした。
- 2) 8時間目までは、授業クラス全員と練習ができるように相手を交代してのペア学習を行った。9時間目以降は、班毎でのグループ学習を中心に授業を進めた。
- 3) 教員は、全体を指導するが、練習している相手のことを一番よくわかるのは投げられたり投げたりする相手であるので、練習しているお互いの教え合いを必ず実践するように指導した。
- 4) 上記3) のことが円滑にできるように、運動観察の方法についての具体的な指示をできる

表2 JUDOの授業計画 (W大学シラバスの一部)
Table2 Syllabus of JUDO (A part of syllabus of Wuniversity)

| | |
|----------------|--|
| 開講期間 | 前期 |
| 曜日・時限 | 金曜日・2時限 |
| 対象学生 | 教育学部 教員養成課程1年 |
| 授業形態 | 実技 |
| 単位数 | 1単位 |
| 授業の概要 | 柔道の理論と実技について学習する。初心者・女性でもできる基本的でソフトなエクササイズを学習初期では主に取り上げ、次第に実践的なJUDOに触れていく。カッコだけでなく、本気になって相手を投げられるような実技能力を獲得するために、互いに教え合いをしながら学習をすすめる。相手とのコミュニケーション能力を開発するためには、相手との距離の近い、本気になって取り組む柔道が適していることを実感できるように授業を行う。そして、日本で生まれた運動文化としての柔道を経験する。最終的には、女性でも相手を本当に投げる爽快感を体感する。 |
| 授業計画 | 1時間目:「スポーツ実習」種目選択ガイダンス・体力テスト できる限り学生の希望種目を選択させ、取り組みへの動機付けを高める。 |
| 学習内容と 主なねらい | 2時間目:受け身(後ろ受け身・斜め後ろ受け身) 安全に、本気になって柔道をするために受け身の原則を理解する。 |
| | 3時間目:組み方・左右の支釣込足 支釣込足で投げられて、受け身ができるようにする。 |
| | 4時間目:左右の支釣込足・帯引きゲーム・乱取 左右の支釣込足で相手を崩し投げるができるようにする。 |
| | 5時間目:小内刈・一畳柔道・乱取 相手の力・重心のかかっている方向に小内刈で投げる。 |
| | 6時間目:大内刈・一畳柔道・乱取 相手の力・重心のかかっている方向に小内刈・大内刈で投げるができるようにする。 |
| | 7時間目:大外刈(投げ込みマット使用)・乱取 大外刈で相手を投げ込みマットの上に投げるができるようにする。 |
| | 8時間目:大外刈・乱取 大外刈で相手の両足を空中に浮かして投げるができるようにする。 |
| | 9時間目:グループ分け・大外刈→支釣込足・乱取 大外刈と支釣込足を使って、相手の力・重心のかかっている方向に投げる。 |
| | 10時間目:体落(投げ込みマット使用)・乱取 体落で相手を投げ込みマットの上に投げるができるようにする。 |
| | 11時間目:背負投(投げ込みマット使用)・乱取 背負投で相手を投げ込みマットの上に投げるができるようにする。 |
| | 12時間目:技の連絡変化・乱取 背負投と小内刈、体落と大内刈を使って、相手の力・重心のかかっている方向に投げる。 |
| | 13時間目:技の連絡変化・乱取 自分の得意な技の連絡変化を使って、相手の力・重心のかかっている方向に投げるができるようにする。 |
| | 14時間目:試合(チーム対抗の団体戦) 柔道の試合を経験しながらチームの協力、本気になることのすばらしさを学習する。 |
| | 15時間目:試合(チーム対抗の団体戦) 柔道の試合を経験しながらチームの協力、本気になることのすばらしさを学習する。 |
| 成績評価の方法 | 本気になって多くの人と柔道をし、相手とのコミュニケーションを深められたかを、出席状況を重視しながら、技術評価、授業への取り組み等で総合評価する。受講学生全員の名前を覚えたかどうか、自分の名前を覚えてもらったかどうかのテストをする。 |
| 履修上の注意 | 柔道は意外と楽しく、友達になりやすいものだといっしょにさせてあげます。柔道着を持っていない者には、大学から柔道着を貸し出します(ブルーのカラー柔道着も貸し出しています)。初心者はもちろん、女性でも履修できます。特に、女性はこのチャンスを逃すと一生柔道を経験できません |

だけ行った。(資料1の指導案参照)

- 男女の区別をせず、男女共習で実際に組み合って練習はするが、乱取り・試合などでは、男子は男子と女子は女子とで行った。
- 6時間目までは、相手に自分の技能レベルがわかるように、まだ恐怖感がぬぐえていない者には、とても怖い・怖い・少し怖い・ほんの少し怖いに応じて、黄色・橙色・水色・紫色の色帯をしめさせて授業を行った。

- 7) 強さ・速さをもって相手を投げることが上手いことであり大切であると指導した。具体的には、引き手を「愛の手」と呼び、投げた後の相手への配慮を心がけさせた。
- 8) 本気になって最終的には試合ができるように、「わかる」だけにとどまらず「できる」ようになることを目指して授業に取り組むように指導した。
- 9) 学生の柔道に対する悪いイメージを払拭することを目的として、授業名称は、JUDOとした。また、内容としては形式にこだわらない自由な雰囲気の中で授業を進めるようにした。具体的には、武道らしいと考える、きっちりとした厳格な礼法・黙想・固め技は、行わなかった。また、希望者にはカラーの柔道着を貸し出しスポーツらしい柔道ということを表現していった。以上のような理由から、あえて授業名称を柔道とせずJUDOとした。

4. 調査内容とその方法

①社会的スキル尺度に関する項目 (Kikuchi's Social Skill Scale・18 : KiSS-18)

「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル (技能)」と定義されている社会的スキルの質問紙は、菊池⁷⁾によって作成されたKiSS-18を用いた(資料2)。18項目数という比較的少ない項目で、高い信頼性と妥当性がある尺度といえる。各項目について「いつもそうだ」5点、「たいていそうだ」4点「どちらとも言えない」3点「たいていそうでない」2点「いつもそうでない」1点として5段階評定尺度によって実施し、合計得点を算出した。

②攻撃性尺度に関する項目 (Buss-Perry Aggression Questionnaire : BAQ)

攻撃性は、いくつかの概念構成からなる複合的な特性として捉えられており、こうした多次元的に測定する尺度として、安藤ら⁸⁾がバスとペリーの攻撃性質問紙をもとに作成した、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)を使用した(資料3)。「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」の4つの特性をそれぞれ測定する下位尺度によって構成されている、24の質問項目からなるものである。各項目について「非常によくあてはまる」5点、「だいたい当てはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「まったくあてはまらない」1点として下位尺度ごとに項目の得点を合計した。2004年度においては、「スポーツ実習」第1週のガイダンス後と「スポーツ実習」最終週後の体育理論講義の時間に無記名で社会的スキル尺度・攻撃性尺度の質問紙を実施した。各尺度の平均得点を算出し対応のないt検定を施した。2005・2006年のJUDO授業においては、無記名で実施したが、質問紙にあらかじめ番号を記載して対応のあるt検定ができるように工夫した。

③授業評価の満足度に関する項目

大学全体で実施されている学生による授業評価を利用し、授業の満足度をみた。授業の最終週に無記名により、授業アンケートを共通科目全てにおいて実施した。そのアンケート項目の授業の総合評価における「この授業の満足度を評価して下さい」という質問項目を取り上げた。そして、7. 100~90% 6. 89~80% 5. 79~70% 4. 69~60% 3. 59~50% 2. 49~40% 1. 39%以下 という7段階評定尺度により回答を求めたものを集計した。

III 結果および考察

1. 社会的スキル尺度について

菊池の報告⁹⁾によると、大学生男子の平均得点は56.40、大学生女子の平均得点は58.35であるとされている。そのことを踏まえて、W大学教育学部の授業実施前における社会的スキル得点57.21は、ほぼ大学生の平均的な値であると言えよう。

図1は、2004年前期の「スポーツ実習」6種目の授業前後における社会的スキル得点の変化について見たものである。全ての種目において、授業実施後における社会的スキル得点の向上は見られたものの、統計的に有意な向上は認められなかった。

しかし、全ての種目をまとめた「スポーツ実習」受講者全体として対応のないt検定を行った結果、授業前後の得点に有意差が認められた（授業前57.21 授業後59.05 $t=2.072$ $df=452$ $p<0.05$ ）。

W大学教育学部においては、共通科目「スポーツ実習」の役割として社会性の涵養・生涯スポーツへの導入などを掲げている。笹原²⁾らによる大学体育の意義に関する研究において、大学体育の意義の一つとして友人関係育成の場として位置づけることが提言されている。W大学においても同様であり、特に前期における「スポーツ実習」では、入学間もない1年生を対象にしていることも踏まえ、大学教育の入門講座と友人関係育成の機会としての役割が大きいと判断している。そのため、授業クラスの人数も30名程度に抑えるように工夫されている。さらに、授業展開においてもグループ学習を積極的に行う保健体育教員が多いことなども、「スポーツ実習」授業実施後の社会的スキル得点の向上に影響した要因と思われる。

種目別で、もう少し詳しく見ると、統計的に有意差は認められなかったが、JUDO・テニスといった対人種目においての有意水準は他の種目よりは高くなっていった。特に、JUDOにおいては授業前の得点58.33から授業後の61.45に3点以上も高くなっていった。しかし、JUDO授業においても有意差は認められなかった（ $df=57$ $t=1.486$ ）。

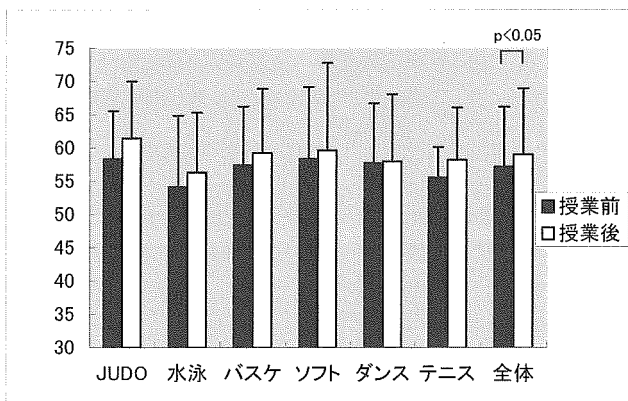


図1 授業前後における社会的スキルの得点
Fig.1 Score of social skill before and after class

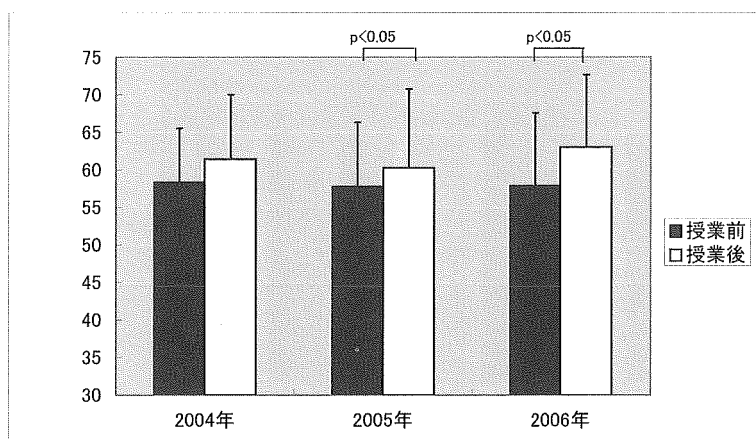


図2 JUDO授業前後における社会的スキルの得点
Fig.2 Score of social skill before and after JUDO class

n.s.)。

そこで、2005年と2006年に実施したJUDO授業において、質問紙調査の方法に工夫を加え、無記名ではあるが授業実施前後のデータに対応がとれるようにした。図2は、JUDO授業前後における2004年・2005年・2006年の社会的スキル得点とt検定の結果である。2005年・2006年では、対応のあるt検定を行った。その結果、両年ともに有意な差が認められた(2005年 授業前57.78 授業後60.26 $df=25$ $t=2.250$ $p<0.05$, 2006年 授業前57.86 授業後63.04 $df=26$ $t=2.426$ $p<0.05$)。つまり、大学生1年生において、共通科目「スポーツ実習」JUDO授業を受講したことにより、社会的スキルの向上ができたと言える。

ところで、柔道原理の柱のひとつである自他共栄とは、自分と他人とが調和をはかりお互いが反映していくことであるとされている。また相助相譲・自他共栄と言われているように、「自分も人、他もまた人であるとの親和の立場に立って、互いに各自の立場・事情を十分に説明または主張し、しかも互譲の精神を失わず、妥当な結論を求めべしとするのが基本となる」と老松¹⁰⁾は述べている。このことは、「他人との関係を円滑にはこぶために役立つスキル」⁹⁾「他者との関係や相互作用を巧みに行うために練習して身に付けた技能」¹¹⁾などと言われる社会的スキルの獲得とつながるところがあろう。つまり、社会的スキルの向上は、理想的な柔道修行が行われていたとも捉えられよう。

2. 攻撃性尺度について

攻撃性尺度として使用したBAQは、攻撃性の多面的特性(情動・認知・行動的側面)をとらえられているとされている⁷⁾。この尺度は、攻撃性を形成する情動的・認知的要素である「短気」「敵意」という下位尺度と、攻撃性の主要な行動的側面である「身体的攻撃」「言語的攻撃」の4つの尺度から構成されている。そして、攻撃性の測定尺度としては、現時点において、最も有用なものと考えられる。

図3は、2004年の「スポーツ実習」授業前後における全攻撃性の得点を見たものである。種目別に見ると、「水泳」「テニス」では授業実施後に全攻撃性の得点が僅かではあるが、低くなっていた。他の、種目においては、授業実施後に全攻撃性の得点がほんの僅かではあるが高くなっていた。但し、全ての種目において、授業実施前後に統計的に有意差は認められなかった。「スポーツ実習」受講者全体で見ると、実施後の方が得点はやや高くなっていたが、有意差は認められなかった(授業前62.69 授業後63.58 $df=450$ $t=0.863$ n.s.)。

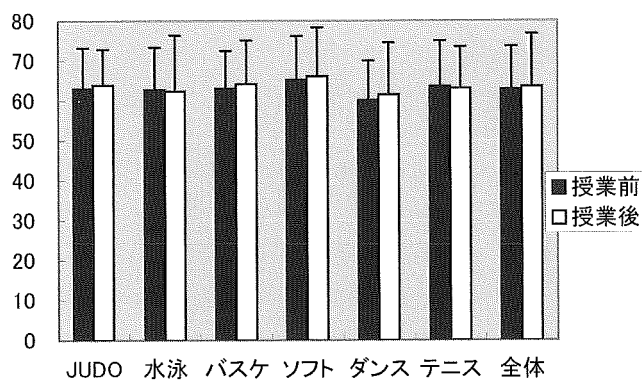


図3 2004年授業前後における全攻撃性の得点
Fig.3 Score of all aggression before and after class in 2004

「スポーツ実習」受講者全体の授業前後における各攻撃性尺度について見たものが図4である。4つの尺度の得点と対応のないt検定

結果は、「短気」(授業前14.00 授業後14.42 $df=450$ $t=1.081$ n.s.)、「敵意」(授業前18.07 授業後18.12 $df=450$ $t=0.118$ n.s.)、「身体的攻撃性」(授業前16.18 授業後16.13 $df=450$ $t=0.107$ n.s.)、「言語的攻撃性」(授業前14.43 授業後14.91 $df=450$ $t=1.600$ n.s.)となり、全ての尺度で有意差は認められなかった。「言語的攻撃性」の得点では、かえって授業後に上昇しているが、「言語的攻撃性」とは言葉を使って他人を攻撃するという意味だけではなく、自己主張、議論好きなどを測定する項目からもなっているため、自分の意見や考えをはっきりと言えるようになったとも捉えられよう。

JUDO授業に焦点を絞り、2004年から2006年までの全攻撃性の得点を、授業実施前後で見たものが図5である。しかし、ここでも全ての年度において、有意差は見られなかった。さらに、3年間の合計で比較したが、やはり授業前後で有意差は認められなかった(授業前62.46 授業後63.65 $df=159$ $t=0.746$ n.s.)。図6は、JUDO授業前後における各攻撃性尺度について見たものである。4つの尺度の得点と対応のないt検定結果は、「短気」(授業前13.98 授業後14.13 $df=159$ $t=0.241$ n.s.)、「敵意」(授業前17.95 授業後18.05 $df=159$ $t=0.187$ n.s.)、「身体的攻撃性」(授業前16.06 授業後16.65 $df=159$ $t=0.843$ n.s.)、「言語的攻撃性」(授業前14.47 授業後14.83 $df=159$ $t=0.752$ n.s.)となり、「スポーツ実習」受講者全体と同様に、各攻撃性の下位尺度においても有意差は認められなかった。

そこで、安藤ら⁷⁾が行った大学生を対象にした全攻撃性の平均得点・標

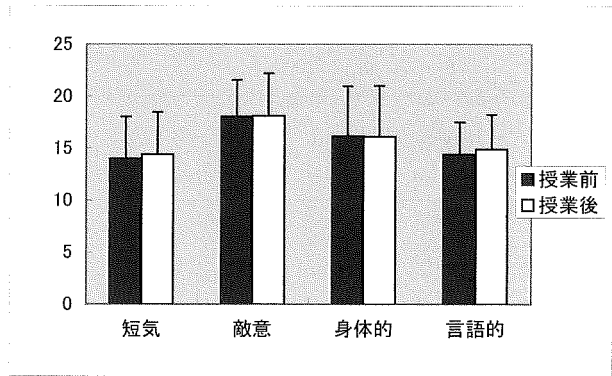


図4 2004年スポーツ実習の授業前後における各攻撃性尺度の得点

Fig.4 Score of four components of aggression before and after class of sports practice in 2004

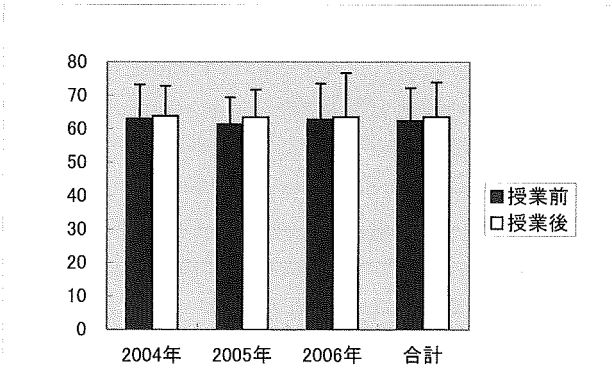


図5 JUDO授業前後における全攻撃性の得点

Fig.5 Score of all aggression before and after JUDO class

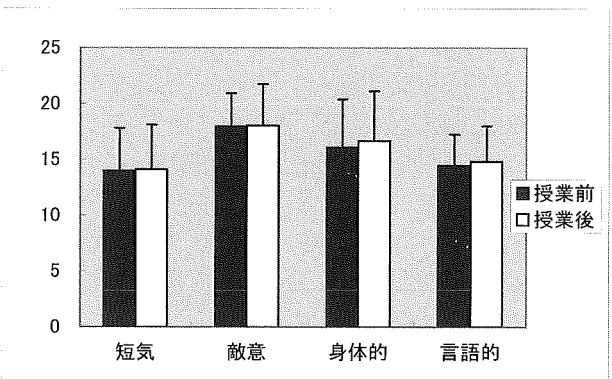


図6 JUDO授業前後における各攻撃性尺度の得点(2004~2006年の合計)

Fig.6 Score of four components of aggression before and after JUDO class (Totals 2004-2006)

準偏差と比較してみると、W大学教育学部1年生の全攻撃性得点は0.1%水準で有意に低い値であることがわかった(W大62.69 安藤ら65.46 $df=838$ $t=3.423$ $p<0.001$)。つまり、W大学教育学部1年生の攻撃性得点は、授業開始前において既に、かなり低い値であったため、15時間という「スポーツ実習」授業後では改善されなかったのではないかと推察する。さらに、小学生を対象にした山口ら³⁾の報告にもあるように、「言語的攻撃性」の項目については、他者と積極的に関わりを持つことができるようになり、自己主張が高まったものと考えられる。そのように捉えれば、今回の全攻撃性得点について、「スポーツ実習」授業後に僅かではあるが得点が上昇したことは、「スポーツ実習」授業に問題があるという結論には到達しないであろう。

JUDO授業前後に関して見ると、他の種目と同様に「言語的攻撃性」について得点が上がっていた。さらに、「身体的攻撃性」においても僅かながら得点が上がっていた。山口ら³⁾は小学校6年生を対象にした8時間の「じゅうどうあそび」授業実践後に、「身体的攻撃性」の得点に有意に低減されたと報告している。今回の大学生によるJUDO授業では、引き手を「愛の手」と呼ぶことから始まり、相手への思いやり、配慮を心がさせた。本気になってやることを大切にしながら、強さ速さをもって相手を投げるが、それでも痛くないように投げるのが上手いことであり大切であると指導していった。JUDOと呼びながらも、表2の授業計画にあるような、本気になって相手を投げられる実技能力を獲得することを目指し、互いに教え合いをしながら学習をすすめた。相手とのコミュニケーション能力の改善には、相手との距離の近い、本気になって取り組む柔道が適していることを実感させようとして取り組んでいった。しかしながら、今回のJUDO授業では、「身体的攻撃性」の低減はおろか、僅かではあるものの得点の上昇が見られたことは、事実である。とするならば、今回のJUDO授業の特徴である、JUDOとしてスポーツ的に実践したことにより、楽しさを追求しすぎ、武道らしさとも言える忍耐・我慢という経験が少なかったことがその一要因とも推察できよう。また、山口ら³⁾は小学校においての実践で、相手とあわせることを強調して指導したことにより、「身体的攻撃性」の低減に影響したと報告している。しかし今回の実践では、本気になって投げることを重要視したことにより、15時間という学習計画では「攻撃性尺度」を改善するまでには至らなかったのかもしれない。今回の研究において攻撃性尺度に関しては、いくつかの課題が残った。

3. 授業評価について

大学全体で実施されている、学生による授業評価の中で「この授業の満足度を評価して下さい」という項目の得点を集計し、満足度評価とした。学部の違いや、実施時期の違いによる影響を排除するために、2004年から2006年の教育学部前期において実施された共通科目「スポーツ実習」を種目別でまとめ、満足度評価を見たものが表3・図7である。各種目の担当教員は、その種目の指導に卓越し、かつ各種目に4年以上の教育指導歴と専門性を持ち合わせた教員になっていた。工藤ら¹⁾の大学教育における体育関連科目の授業評価では、5段階評定尺度に換算した5点満点では、総合評価としての満足度は約4点になっている。W大学教育学部前期における「スポーツ実習」の満足度評価は、全体で平均が6.52、5段階評価に換算すると4.66とかなり高い評価を受けていることがわかった。教育学部という学部特性から全国平均よりも授業評価は、高めになりやすいと推測できるが、そのことを加味してもW大学教育学部前期における「スポーツ実習」の授業評価は高いと言える。そして、その中でもJUDOの満足度評価は最も高く、7段階評定尺度で平均すると6.71の高い評価を受けた。5段階評価に換算すると、4.79と極めて高い

表3 スポーツ実習種目別の満足度評価 (2004~2006年の総計)

Table3 Satisfaction rating evaluation according to sports practice item (Totals 2004- 2006)

| 種目 | 受講者数 (人) | 回収数 (人) | 7. 100 ~90% (人) | 6. 89~ 80% (人) | 5. 79~ 70% (人) | 4. 69 ~60% (人) | 3. 59 ~50% (人) | 2. 49~ 40% (人) | 1. 39% 以下 (人) | 平均 (点) |
|-----------|-------------|------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|-----------|
| JUDO | 86 | 82 | 63 | 14 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6.71 |
| 水泳 | 64 | 28 | 16 | 9 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 6.43 |
| ソフトボール | 107 | 105 | 76 | 21 | 6 | 1 | 1 | 0 | 0 | 6.62 |
| ダンス | 100 | 95 | 55 | 19 | 11 | 4 | 3 | 2 | 1 | 6.15 |
| テニス | 69 | 65 | 49 | 12 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6.69 |
| バスケット | 127 | 115 | 79 | 32 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6.63 |
| バドミントン | 100 | 89 | 63 | 19 | 5 | 0 | 0 | 1 | 1 | 6.55 |
| フライングディスク | 134 | 126 | 71 | 42 | 10 | 2 | 0 | 1 | 0 | 6.42 |

満足度評価だと言える。

大学教育における体育実技種目として柔道は、十分にその役割を果たすことが可能な種目であることが確認された。しかし、W大学教育学部においても「スポーツ実習」柔道授業開設当初は、選択希望者が少ない状況が続いた経緯がある。中学校や高等学校の柔道授業についての好意的

な運動経験があれば、選択希望者も増え「スポーツ実習」種目として柔道を開講することに問題はおこらない。しかし、好意的な柔道授業経験を有する者は、多くはないのが現状であろう。中学校・高等学校での柔道授業に対して、ここで言及することは控えるが、W大学においてもJUDO選択希望者の、64%は柔道経験のほとんどない女子によって占められている(表1)。もちろん、中学校・高等学校での柔道経験により、好意的感情が高まり、大学において柔道を選択する学生が存在するのも事実である。しかし、これまでの研究報告^{12,13)}にもあるように、より一層柔道のイメージアップを図りながら、さらに柔道の教育的価値認識を高めていく必要がある。

IV まとめ

本研究は、大学体育における共通科目、「スポーツ実習」JUDO授業において、お互いの教え合いができるように工夫された初心者柔道指導プログラムでの効果を、社会的スキル尺度(KISS-18)・攻撃性尺度(BAQ)・学生による授業評価から分析検討したものである。

その結果を要約すると、次のごとくである。

- 1) 社会的スキル尺度については、15時間のJUDO授業実施後において、有意に高くなった(p<0.05)。

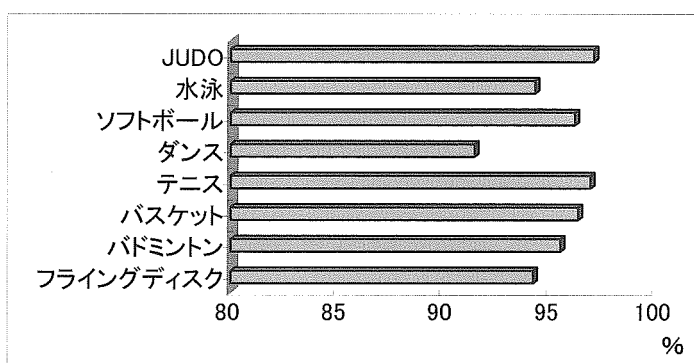


図7 スポーツ実習種目別の満足度

Fig.7 Satisfaction rating according to sports practice item

- 2) 攻撃性尺度については、授業前から過去における報告に比較し有意に低値を示していた ($p < 0.001$)。そのためか、JUDO授業実施後においても、有意な変化は認められなかった。
- 3) 大学体育のスポーツ実習種目の中においても、柔道は他の種目より満足度が高く、大学体育における目的を達成するための種目としても適していることが伺えた。

参考文献

- 1) 工藤和俊・飯野要一・松本秀夫 (2006) 大学教育における体育関連科目の授業評価—他の共通科目との比較から—, 大学体育学, 3: 37-44.
- 2) 笹原妃佐子・大岩雅子・川村誠・笹原英夫 (2006) 大学における体育の意義について, 大学体育学, 3: 15-23.
- 3) 山口昭彦・永木耕介 (2004) 「じゅうどうあそびによる体ほぐしの運動」の指導実践における効果について, 実技指導教育研究, 18: 79-94.
- 4) 高橋進・貝瀬輝夫・村田直樹・斎藤聡・平野弘幸・矢野勝・柁澤博之・中村一成・三宅仁 (2002) 柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について, 講道館柔道科学研究会紀要 第九輯: 157-179.
- 5) 松尾太加志 (1999) コミュニケーションの心理学, ナカニシ出版, Pp.237.
- 6) 杉山重利 (1997) 武道授業の改善—スポーツから入りて武道に到る—, 月刊武道, Vol.370: 90-92.
- 7) 堀洋道 (2001) 心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉—, サイエンス社, Pp.453.
- 8) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志他 (1999) 日本版Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討, 心理学研究, 70: 384-392.
- 9) 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する, 川島書店, Pp.212.
- 10) 老松信一 (1984) 精力善用・自他共栄道とその指導, 講道館柔道科学研究会紀要 第六輯: 3-16.
- 11) 相川 充 (2000) 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—, サイエンス社, p.7.
- 12) 高橋 進・村田直樹・貝瀬輝夫・矢野 勝・中村一成・斎藤 聡・柁澤博之 (1999) 青年期女子の柔道に対する意識について—青年中期の女性を中心として, 講道館柔道科学研究会紀要 第八輯: 159-178.
- 13) 矢野 勝 (2004) 柔道指導プログラムの開発に関する研究—効果的な初心者指導を探って—, 月刊武道, Vol.453: 104-109.
- 14) 松井 豊 (1986) 向社会的行動の個人内要因, 対人行動学研究会 (編), 対人行動の心理学, 誠信書房, pp267-273.
- 15) 杉山佳生 (2004) 競技社会的スキル及びスポーツにおける個人・社会志向性と日常場面での向社会的行動との関係, 健康科学, Vol.26: 41-48.
- 16) 本村清人 (2003) 新しい柔道の授業づくり, 大修館書店, Pp.238.
- 17) 尾形敬史・小俣幸嗣 (2005) 初心者・生徒を安全に指導するために 柔道指導Q&A, 道和書院, Pp.75.
- 18) 鮫島元成・高橋秀信・瀧澤政彦 (2006) Q&A 中・高校 柔道の学習指導, 大修館書店, Pp.94.
- 19) 松岡信之 (2000) 21世紀の大学体育のあり方, 体育科教育, 48(1): 30-33.
- 20) 高橋健夫 (2003) 体育授業を観察評価する, 明和出版, Pp.184.

資料1 学習指導案

(1) 本時のねらい (5時間目/15時間)

- ・相手の力・重心のかかっている方向に小内刈で投げる。
- ・後方に倒す技の原理原則を学ぶ。
- ・小内刈についての技術を理解し、互いに教え合えるようにする。
- ・一畳柔道を通して、倒す喜びを体感する。

学習の内容

| 段階 | 学習活動 | 指導・支援の留意点 |
|--------------|--|--|
| はじめ (15分) | 1. 整列、挨拶、出欠点呼 ・正座 座礼 2. 本時の学習内容の把握 3. 準備運動 ・ストレッチング ・受け身(後ろ受け身 座位、中腰、立位で各8回) 斜め横受け身 注1) 8回 | ・本時の学習内容について説明する。 ・小内刈は、田村選手・古賀選手が背負投との連絡変化が活かせるので使用していたことを話し、学生の動機付けを高める。 ・後方に倒れる技(小内刈)を学習するための、準備運動にしっかりと指示する。 |
| なか (65分) | 4. 前時の復習 ・支釣込足の練習 回りながらでの、かかり練習、約束練習 ・支釣込足を使つての自由練習 5. 小内刈の学習 ・かかり練習、約束練習 その①「受」無抵抗で ①横を向いて「受」と近づき、両手は引きつける。 ②右足の土踏まずで相手の左足首あたりを刈る。 ③釣り手は、柔道着を着させる方向に押す。 ④愛の手は、刈つた後少し前に差し出しながら相手を引く。 ・ペア学習での確認 ①「受」から「取」へ 刈られる足首は痛くない ← 刈られる足が親指の方向にすべるように動く ← 刈られる時、ビクッとするようなハットする感覚がある ← ②「取」の確認 投げられた「受」の倒れた方向で ← ・かかり練習、約束練習 その②「受」が後方に体重をかけて | ・1列目と4列目、2列目と3列目で練習するように指示する。 ・相手を適宜に交代させる。 ・男子どうし、女子どうしで行うように指示する。 ・支釣込足をかけようとする、体重を後方にかけて防御して支釣込足がかかりにくいことがあることを確認させる。 ・そのような場合、小内刈が効果的なことを示範する。 ・小内刈の説明をする ・後方に倒す時の、押す方向についての原則を考えさせる。 ・「受」は、膝を曲げながら受け身をとらないように指示する。 ・ペア学習での確認(お互いの教え合いを促す) 刈り足は、土踏まずで刈っているか? ← 刈り足は、しっかり刈っているか? ← 刈り足のタイミングはいいか? ← 釣り手の押す方向は? ← ・「受」は体重を徐々に大きくかけていくように指示する。 ・「取」は、「受」の体重がかかっているかどうかを、柔道着の引かれたから判断し、体重がかかっていない場合は「受」に体重をかけてもらうように指示する。 ・投げる者は、愛の手を少し前に差し出すことを注意する。 ・互いに引っ張り合う方向とスペースに注意をする。 ・いろいろな相手を代えて行うように指示する。 ・力任せにならないように、 ・足の裏以外が畳みに触れそうになったら受け身をとるように ・腕を突っ張って防御しないよう注意を促す。 |
| (10分) | 8. 整列、挨拶 ・本時の学習活動の反省、次の時間の課題 ・正座 座礼 ・アンケート調査 ミニレポート | ・本時のまとめをする。 ・次の時間にする技の紹介をする。 ・気持ちよく挨拶をして次の時間につなげる。 |

注1) 座位から斜め後方に横受け身のように片手で畳をたたき、その後で足を畳に置く受け身。従来の横受け身は、学習せずに後ろ受け身と、斜め横受け身だけを学習した。

注2) 初心者にとっては学習した技をいったいどのタイミングでどの技を掛けるのかは大変難しい問題である。自由練習(乱取り)では相手が自由に動き回りかつ抵抗もするため、なかなか学習初期段階では相手を投げるのが困難となる場合が多い。そこで簡易ルールでの自由練習の方法を試案したものが、「一畳柔道」である。一枚の畳の真ん中で互いに引っ張り合いをしながら小内刈等の後方へ倒す技を掛けて相手を投げるものである。綱引きのように、相手を引っ張り自分の両足を1枚の畳から外に出されば1点・小内刈等の後方への技で相手を倒せば5点とし、得点をしたら再び真ん中から始める。そして、時間内にどちらが多く得点できるかを競わせるといった簡易ルールでの自由練習である13)。

資料2 社会的スキル(KISS-18)質問紙

| | いつもそうだ | たいていそうだ | どちらともいえない | たいていそうでない | いつもそうでない |
|---|--------|---------|-----------|-----------|----------|
| 次の文章を読んで、自分にどれだけ当てはまるか適当な数字一つに○をつけて下さい。 5. いつもそうだ 4. たいていそうだ 3. どちらともいえない 2. たいていそうでない 1. いつもそうでない | | | | | |
| 1 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 他人を助けることを、上手にやれますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 仕事をするとときに、何をどうやったらよいか決められますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

資料3 Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)

この質問紙は、あなたの感情表現についておたずねするものです。あてはまると思う番号に一つ〇をつけて下さい。考えすぎると答えられなくなりますから、気楽にどんどん答えてください。

| | 非常 はまる よくあて | だ いた い あ て は ま る | ど ち ら と も い え な い | あ ま り あ て は ま ら な い | 全 く あ て は ま ら な い |
|---|-------------------|---------------------------------------|---|--|---|
| D 1 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 2 どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| D 3 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| A 4 ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 5 相手が先に手をだしたとしても、やり返さない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| A 6 かつとなることを抑えるのが難しいときがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 7 陰で人から笑われているように思うことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| A 8 ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| D 9 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 10 私を苦しめようと思っている人はいない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| A 11 いらいらしていると、すぐに顔に出る。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| D 12 でしゃばる人がいても、たしなめることができない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| A 13 たいした理由もなくかつとなることがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 14 挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 15 私を嫌っている人は結構いると思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 16 人とよく意見が対立する。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 17 人をなぐりたいという気持ちになることがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 18 人からバカにされたり、意地悪されたと感じたことはほとんどない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 19 権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 20 嫌いな人に出会うことが多い。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 21 なぐられたら、なぐり返すと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| D 22 自分の権利は遠慮しないで主張する。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| B 23 友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| C 24 かつとなって、物を壊したくなることもある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

A:短気 B:敵意 C:身体的攻撃 D:言語的攻撃 但し、質問を取るときはABCDは記入しないでアンケートを実施
質問2. 5. 10. 12. 18は逆転項目